**安樂寺報恩講（解散法要）　表　白**

敬って、阿弥陀如来・釈迦牟尼如来・十方三世の諸仏如来に申し上げます。

本日ここに、恭しく尊前を荘厳し、懇ろに聖教を読誦して、安樂寺最後の報恩講を勤修いたします。

ひるがえって見れば、この世は忍土というほどに、常住なく変転つねにして、喜びを求め、楽しみを追いかけようとも、病患は傍らにあり常にこの身を悩まし、老いは気づかぬままに常に迫り続け、また突然の別離に嘆くこと避けがたき場であります。まさに一切皆苦というべき様相を呈しているのが我々の生きるこの世でありましょう。

釈迦牟尼如来は、遠く印度におでましになり、阿弥陀如来の本願をお説きくださいました。その真実の道をお示しくださった由縁は、ひとえにわれら一切群生をこそ救わんとする願いでありました。

宗祖親鸞聖人は、その願いに導かれ、一切皆苦のこの世において生きる立脚地を、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と、阿弥陀如来の本願に頷かれました。

　群萌を救う本願に立って生きんとした諸仏の伝統は、天保九年の宗祖親鸞聖人御影に見るに、遥か江戸時代の頃、ここ野林の地に念仏道場・安樂寺として結実したのです。

それより、二百年後の今日に至るまで、連綿として報恩講が営まれ、地域に生きる人々の墾ろなる念いにより修繕を重ね、戦争や風水害にも耐え、寄り合い談合の場として、また老少、男女、善悪、様々に人を分け隔てる我らにおいて、あらゆる存在（こと）が、平等で共にあることに気づけとの教えを、この安樂寺において受けとり続けてきました。

しかしながらいま、「諸行無常」の理のとおり、安樂寺は世の移ろいによって一つの役割を終え、私たちに重ねて念仏を勧めるはたらきとなろうとしています。

請い願わくば、如来よ、威神を加したまへ。いま、ここよりあらたに、ここに集う人々の、聞法生活の歩み出しが始まることを、切に念じあげることであります。

 二〇二二年三月十三日 安樂寺 住職代務者　釋 ●● 敬って白す